

はじめに

新宮市教育委員会 教育長 速水盛康

市内の小・中学校の先生方の熱心なご指導とご協力により、今年度も人権作文集「春を呼ぼう」を発刊する事ができました。

今年は新型コロナウイルス感染症の流行により、私たちの生活、また、子どもたちを取り巻く環境は一変しました。学校生活においても一斉休校、行事等の中止・縮小など、これまで当たり前であった日常が当たり前でなくなりまりました。

しかし、日常が制限される中でも、子どもたちは日々気付き、学び、たくましく成長している、そうしたことが実感できる、温かい心のこもった作文を書いていただきました。

さて、新型コロナウイルス感染症に関連して、感染された方やその家族、医療従事者などへの差別、人権侵害が大きな問題となっています。日本赤十字社が発行した「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！ ～負のスパイラルを断ち切るために～」では、不安や恐れが、私たちの「気づく力」、「聴く力」、「自分を支える力」を弱め、嫌悪・偏見・差別を生み出し、人と人との信頼関係や社会のつながりが壊されてしまうこと、この事態に対応しているすべての方々をねぎらい、敬意を払い、みんなが一つになって負のスパイラルを断ち切ることが大切であると提言しています。

この人権作文には、子どもたちが家族のこと、学校や友だちのこと、平和、社会問題や命の大切さ等について、純粹に、豊かな感性を通じてしっかりと考えた作品が載せられています。改めて「人権」の大切さ、また、それを守っていくことが私たちに課せられた使命であると決意を新たにしたいところです。

この作文集をより多くの方々にお読みいただき、差別のない、人権が守られた新宮市の実現に向け、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

おわりに、この文集発刊に当たり御尽力をいただいた市内小中学校をはじめ関係者の皆様方に対し、心から感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。

★小学生の部★

★中学生の部★

おとうとのわたる	高田小学校一年	1	誹謗中傷	光洋中学校一年	12
おじいちゃんちの犬	王子ヶ浜小学校二年	1	制服について	緑丘中学校一年	13
マリーゴールドでそめもの	熊野川小学校二年	2	男女差別と人権	城南中学校一年	13
ありがとう	神倉小学校二年	3	性について	高田中学校一年	14
ぼくの家族	三輪崎小学校三年	3	心で手をつなごう	近畿大学附属新宮中学校二年	15
かわいい弟	王子ヶ浜小学校四年	4	インターネットを考える	熊野川中学校二年	16
新しい友だちと出会うまで	熊野川小学校四年	5	手話の大切さ	光洋中学校二年	18
にんちしようについて	高田小学校四年	6	二人の私	緑丘中学校二年	19
しあわせ	神倉小学校四年	6	差別と偏見のない世界	近畿大学附属新宮中学校二年	20
妹の成長	三輪崎小学校五年	7	インターネットが引き起こす誹謗中傷の恐ろしさ	城南中学校二年	21
親友ってなに	神倉小学校五年	8	もう一つの選択肢	高田中学校二年	22
未来	熊野川小学校五年	8	どんな時でも協力し合える社会	近畿大学附属新宮中学校二年	23
個性	王子ヶ浜小学校六年	9	差別について考えてみた	高田中学校二年	24
SNS(誹謗中傷)	三輪崎小学校六年	10	幸せのために	緑丘中学校三年	25
親切と笑顔	高田小学校六年	10	よりよい世界にするために	熊野川中学校三年	26
			私の青は君の赤・僕の楽は君の苦	光洋中学校三年	27
			平和と戦争	城南中学校三年	28
			手話を通じて考えたこと	熊野川中学校三年	29

小学生の部

おとうとのわたる

高田小学校 一年



ぼくのおとうとのわたるは、三さいです。わたるは、げんきでおもしろいです。かおがまるくてかわいいです。いつも、ぼくについてきます。わたるは、おにくがだいすきです。わたるは、おもしろいかおもしろい。わたるのすきなおもちゃはレゴです。

レゴでいろんなものをつくるのがだいすきです。ひとりですべています。ぼくは、すごいなとおもいます。ときどきふたりでつくることがあります。

あさおきて、バジャマのまま、おしろをつくったことがあります。

わたるは、

「これ、でんわ。」

といって、ぼくにブロックをわたしてくれました。ぼくは、それをおしろにつけてあげました。それを見て、とてもよろこびました。

学校のある日にも、ぼくがかえってから、犬のゆずといっしょにわたると、おかあちゃんと三人でよくさんぽにいきます。そのときぼくは、じてん車でいきます。いえのちかくをさんぽします。そのときは、うれしくてはしっていくので、ぼくとおかあちゃんはおいかけます。そんなとき、うしろでわたるがぼつんとこさされて、

「まってえ」

とことこはしってきます。ぼくは、かわいいそうになってまってあげます。

ぼくとあそぶのがすきなわたるは、いつも、

「あそんで、あそんで。」

といっについてきます。そんなとき、ぼくは、ほんとうにかわいいなとおもいます。

わたるがすこし大きくなったら、もうすこしむずかしいレゴをいっしょにつくったり、しょうぎをさしたりしたいです。

わたるは、かわいいたいせつなおとうとです。

おじいちゃんちの犬

王子ヶ浜小学校 二年



わたしのおじいちゃんは、海の近くにすんでいます。おじいちゃんとおばあちゃんと犬のななちゃん、三人でくらしています。

わたしが小さい時から、ななちゃんとおそんでいました。だっこをしたり、おやつをあげたり、タオルをひっぱりあっこしたりしてあそびました。

ななちゃんのさんぽに行ったこともあります。ななちゃんとわたしとおじいちゃんとおばあちゃん、貝ひろいに行きました。ななちゃんは歩くのがいやで、すぐに帰ってきました。

ななちゃんは、とっても食いしんぼうです。わたしが、

「ななちゃん、おやつだよ。」

と言うと、しっぽをふって、よろこびます。わたしが来るより、おやつをくれるから、うれしいという気もちがよくて、おもしろ

ろいです。

わたしがごはんを食べていると、うでのすきまから、顔を出してきます。わたしがぐっと手をにぎっていると、手のおいをかいてきます。どれもがかわいくて、ななちゃんが大すきです。

すこし前に、ななちゃんがたおれたり、はいたりしました。それから、おじいちゃんの家に行くことが多くなりました。何日も行くうちに、前は、元気がなかったのに、その日は、げんかんまでむかえに来てくれました。その時は、とてもかんどうしました。

わたしが家にいる時に、おばあちゃんから電話がかかってきました。「ななちゃんがしんでしまったら、どうしよう。」と思って、耳をふさぎました。ななちゃんはどうとうしんでしまいました。

その時は、大いそぎで行きました。ななちゃんは、ダンボールの中にいました。わたしは、

「ななちゃん。」

と、よびました。目をあけてくれませんでした。みんな、なきました。それから、何日かたって、

「ななちゃんが、しんでしまった。」ということが、いつも心にありました。けれど、いつまでもかなしんでいると、「ななちゃんもよろこばない。」と思いました。ななちゃんとの楽しい思い出もたくさんあります。わたしは、心の中で、

「ななちゃん、ありがとう。」

と、天国にいるななちゃんに、おれいを言いました。

マリーゴールドでそめもの

熊野川小学校 二年



生活の時間、一年生といっしょにマリーゴールドでそめものをしました。

まず、花つみをしました。つんだ花の花びらをはさみで切りました。においが「ちょっとくさ。」と思いつつ、切りました。切っても切っても、へりませんでした。一年生がどんどんつんできたからです。楽しかったけど、たいへんでした。

つぎに、ビー玉でもようをつけたぬのを、なべでましました。「ぐるぐる、とんとん。ぐるぐる、とんとん。」と十五分くらい、はしでまぜました。さました後、まほうの水に入れました。きれいな黄色になりました。

「これでおわり。」と思ったのに、まだおわりませんでした。もういちど、なべに入れてにました。さっきまでは一年生とこうたいでまぜていたのに、こんどはひとりです。立ちっぱなしでまぜつづけました。足も手もつかれました。そのまま一日おいてかえんせいです。きれいにそまっています。わたしは、自分のもきれいだっただけ、みんなのもきれいにできてよかったと思います。一年生がよろこんでいたのでうれしかったです。

そめものは、一年生の時よりやることがたくさんあって、たいへんでした。もっとかんとんにできると思っていたので、びっくりしました。一年生の時は、先生がぜんぶやってくれていたんだと気がつきました。わたしが知らないうちに、かわりにやってくれる人があるんだと思いました。家ならお母さん、学校なら友だちや五、六年生や先生です。お母さんは、ごはんを作ったりせん

たくやそうじをしてくれます。五、六年生は、うんどう会やっぴょう会のじゅんぴやかたづけやしかいをしてくれます。わたしも、自分のことだけじゃなくて、みんなのことも考えられる人になりたいです。そして、人のやくにたちたいと思います。

ありがとう

神倉小学校 二年



わたしは、休み時間におにごっこをしてあそんでいました。わたしは、おにからにげているときにこけてしまっ、ひざからちがでているところを見たら、こわくてなみだが出てきました。

「だいじょうぶ。」

と、言っ、ほけんしつにつれて行ってくれました。おねえさんは、

「こけていたかったね。」

と、やさしく言ってくれました。わたしは、すごくうれしかったです。ほけんしつで先生に見てもらっていると、チャイムが鳴りました。わたしは「ありがとうございました。」とおれいを言いたかったけど、言えませんでした。

べつの日のお昼休み、外であそんでいると、おにごっこをしていた女の子が、友だちとぶつかってないていました。わたしは、六年生のおねえさんにたすけてもらったことを思い出して、一年生の女の子に、

「だいじょうぶ。」

と、言いました。そして、ほけんしつにつれて行きました。その後、一年生の女の子が、わたしに、

「ありがとうございます。」

と、言ってくれました。わたしは、うれしくなりました。

わたしは、「六年生のおねえさんに『ありがとうございました』と言えないのかな。ちゃんとおれいを言いたいな。」と、思っていました。その時、そのたすけてくれたおねえさんが歩いていたので、おねえさんのところに行っ、

「たすけてくれてありがとうございました。」

と、言うことができました。おねえさんは、

「どういたしまして。」

と、やさしく言ってくれました。おねえさんに会えて、ちゃんと「ありがとうございました。」と言えて、うれしかったです。

わたしは、こまっている子がいたら、たすけてあげることが大切なんだな、と思いました。なっている子がいたら「だいじょうぶ。」と、やさしく言っ、あげたいと思います。こまっている子がいたら、六年生のおねえさんみたいに、たすけてあげたいと思います。

ぼくの家族

三輪崎小学校 三年



ぼくの家族は、ぼくが気づかないところでも毎日がんばってくれています。

お父さんは、毎日仕事をがんばってくれています。お父さんは、

仕事がいそがしいので、いつも朝早く家を出ています。でも、水曜はほぼ休みの日で、いっしょに遊べるのでとってもうれしいです。

お母さんはいつも大へんそうです。早く仕事に行って帰ってきたら、せんたく物をほして、また次のせんたくのスイッチをおして、夜ごはんを作って、食きをあらって、ふとんをしいてと、いろいろなことをしてくれます。とってもとっても大へんそうです。だからぼくも、まずは皿あらいからつだってあげようと思います。

ぼくが一寸くらいのとき、お兄ちゃんはさのほ育所に通い始めたそうです。さいしょは家にいたいと言っていたけれど、ぼくが三才、お兄ちゃんが六才になったころには、友だちもたくさんできて、楽しそうにほ育所に行くようになったそうです。今は六年生で、たくさんの友だちとじゅくにも行っています。

弟はとても元気です。前にお母さんと弟といっしょに走っていた時のことです。弟がこけて、お母さんが、

「大じょうぶ。」

と、心配しました。弟は、

「大じょうぶやよ。」

と、言いました。でも、何日かたってから弟は、

「手の指がいたい。」

と、言い出したので、びょういんに行くと、

「こっせつやな。」

と、言われたそうです。こっせつはもうなおりましたが、今どはひどいねんざをして。まつばづえで歩かなければならなくなったりました。これからはけがにも気をつけてほしいです。

おばあちゃんはこしがいたいのに、せんたく物をしてくれたり、ごはんを作ってくれたり、いろいろがんばってくれています。も

う少し休んでほしいと思います。

おじいちゃんも、お米を作ってくれていて、いろいろいそがしそうです。おじいちゃんの作ってくれるお米はとってもおいしいです。

ぼくの家族はみんながんばっています。そんな家族が大すきです。

ぼくも、お兄ちゃんのように、これから勉強をがんばっていきます。

かわいい弟

王子ヶ浜小学校 四年



十月七日は、私のお姉ちゃんのたん生日です。でも今年は、新しいうれしさがありました。私に弟ができました。本当にうれしかったです。ずっと妹だった私が、やっとお姉ちゃんになれました。私は赤ちゃんが生まれたと聞いた時、うれしすぎて心がドキドキしました。赤ちゃんの名前が決まり、お父さんとお母さんは「ひびきがかっこいい」と言っていました。

けれど、新型コロナウイルスのせいで、病院にあまり行けなかったので、なかなか赤ちゃんに会えませんでした。病院には行けなかったけれど、赤ちゃんをガラスごしで見ることしかできなかったり、病院に行ってもガラスの向こうに赤ちゃんがいなかったこともあったりしたので、その時は残念でした。

生まれて五日ほどたったころ、家にお母さんと赤ちゃんが帰ってきました。お母さんがだっこしている赤ちゃんを見ると、ガラ

スゴしで見えていたころよりも、もっとかわいかったです。頭の中で考えたことは「だっこしてみたい。」でした。ねていて落ちついていたので、だっこしてみました。とてもかわいかったです。けれど、弟は私のだき方がいだったのか、泣いてきました。私は、立って歩きながら弟をあやしました。しばらくすると泣きやんだので、ホッとしました。

三週間ほどたったある日からは、弟はものすごいくらいの声で大泣きしたので大変でした。弟はだっこが大好きのように、ベッドにねかせるとすぐに大泣きしました。ねていても、ベッドに置こうとしたら泣いてくるのです。けれど、だっこをするとすぐに泣きやむことが多かったです。家族は、弟のことで頭がいっぱいでした。そして、お母さんがこう言いました。

「今は三週間たって一番大変な時期なんだよ。何でかって言ったらね、赤ちゃんはずっとお腹の中にいたから、ようやく外に出たことが少しずつ分かってきて、不安になってきちゃうんだって。」私は「そうなんだ。」と思いました。

一か月ほどたったころ、弟が少し笑いました。わたしは、弟の笑う顔がかわいかったから、写真をとろうとリビングにもどってきたら、弟の顔はいつもの顔にもどっていました。弟は、言葉はしゃべらないけど、泣いたり笑ったり、たまにおもしろい顔をします。私は赤ちゃんでも感じようをもっているんだなと思いました。

私は、弟が生まれてきて、おむつをかえたりミルクを作ったりあげたりするのを手伝うのが大変と思うこともあるけれど、弟がかわいいからそれもうれいしいと感じています。弟の表じょうを見ても、何をしてほしいのかなあ、と考えながらお世話をしています。もう少し大きくなったら、公園で遊んであげたいし、絵本を読んだり勉強や色んなことを教えてあげたりして、楽しいことをたくさん

さんしてあげたいです。

新しい友だちと出会うまで

熊野川小学校 四年



私は、大阪からここ、和歌山に年長さんの時に引っ越してきました。年長さんの時だったから、引越しをしてもなんとも思わなかったけれど、一、二年生になったら気づいてきました。「○○ちゃんに会いたい、悲しい、あの時にもどりたい」そういう気持ちが一、二日ごとに強くなっていきました。私は、その時思いました。友だちと別れるだけで、こんなに悲しいんだって。友だちがいなだけでこんなに楽しくないんだって。その時は気づきました。友だちはとっても、とっても、大切な人なんだって。私は初めてそう思えました。

けれど、ずっと友だちがいなかったわけではありません。引越して新しい保育園に行って、みんなの前でじこしようかいをして終わってすぐに声をかけられました。

「いっしょに遊ぼう。」

初めに言われた言葉がそれでした。それで私は、とっさにこう答えました。

「うん。」

それが私の新しい友だちとの初めての会話でした。初めはちょっときんちょうしていたけれど、その新しい友だちは、やさしく接してくれました。その友だちはけんかをしてもすぐにあやまってくれて、笑顔がかわいくて、新しい友だちは、昔の友だち、大阪

にいた私の大好きな友だちとそっくりなのです。私はずっと会いたいと思いつけたら昔の友だちがいるみたいでとってもうれしかったです。

昔の友だちには、会えるかどうかかわからないけれど今の友だちとは、学校でいっしょに勉強ができるし、学校でも遊べるし、学校で笑い合えるから幸せです。

にんちしょうについて

高田小学校 四年



ぼくは、にんちしょう教室で、初めてにんちしょうを知りました。

にんちしょうとは、新しいことをおぼえられなかったり、わすれてしまったりすることです。けがとちがい、見た目ではなかなかわからないそうです。そして、たくさんの方がにんちしょうに困っているそうです。この話を聞いて、いっしょに住んでいるおじいちゃんやおばあちゃん、みじかな人がにんちしょうになったら、ぼくにできることはないかと考えました。すると、ぼくたちにもできることを教えてくれました。まず、忘れたことがあったら何度でも教えてあげたらいいと教えてくれました。ほかに、日にちがわかるように、カレンダーに印をつけたりメモを用意したりするといいと教えてくれました。

もし、近くににんちしょうやものわすれをしてしまう人がいたら、今日教えてもらったことをしたいと思います。また、いろんな人にも教えてもらったことを伝えたいです。そして、にんちしょう

うの人もそうでない人も、みんなが幸せに生活できるといいなと思います。

しあわせ

神倉小学校 四年



みなさんは、「しあわせ」を感じたことはありますか。また、それはどのような場面感じますか。

「しあわせ」とは、人間が生まれながらに持っているけん利である『人けん』だと思っています。それは世界中の全ての人が人間らしく生きるためのものです。しかしそれをいじめなどでこわそうとしている人がいます。そして、いじめられて自さつをしてしまった子どももたくさんいます。それはぜっ対にあってはならないことにちがいありません。たまに、「いじめられた方も悪い」と言う人もいますが、それはぜっ対にちがいます。そのようなことを言う人は、自分がいじめられたらどう思うかを考えてみてください。気持ちを感じたら、「いじめられる方も悪い」なんて言えないと思います。いじめられる理由なんてないのです。悪いことは何もしてないのに、人が「しあわせ」をうばっているのです。その人の「しあわせ」をうばう前に、ちゃんと考えて行動してほしいと思います。

もう一つ、「しあわせ」の意味を考えた時に、私は、友達と学校や公園で遊んでいる時や家族といっしょにご飯を食べたり、他愛もない話をしたりしている場面が思いうかびました。他にも、ずっとほしかった物が手に入った時にも「しあわせ」を感じます。

みなさんも同じではないのでしょうか。しかし私は、このような「うれしい」や「楽しい」などといったプラスの感情だけが「しあわせ」とはかぎらないと思います。例えば、テストで低い点数をとった時の「悲しい」という気持ちやお母さんに怒られた時に感じる「つらい」という気持ちもまた、「しあわせ」ではないのかなと思います。それはどういうことかと言うと、「うれしい」「楽しい」「悲しい」「つらい」、その感情を感じられることが「しあわせ」なのではないかと思っただけです。

世の中には、親からぎゃくたいされ、「悲しい」といった感情さえ分からなくなってしまった子どもたちがたくさんいます。初めは「悲しい」という気持ちがあっても、それがどんどん増えて自分の気持ちが分からなくなるのだと思います。テレビなどでそんなニュースを見ているうちに、私たちの当たり前にある毎日が「しあわせ」だということに気づきました。そして小さなことでも「しあわせ」を感じられる人になりたいと思いました。そんな人が世界中にたくさんふえると、戦争がなくなったりはんざいがへったりするのではないのでしょうか。

友達と遊ぶ時、家族といっしょにすごす時、自分も周りの人も小さな「しあわせ」を感じられる心を持つようになったらいいなと思います。

妹の成長



三輪崎小学校 五年

ぼくには、4月に生まれた赤ちゃんがいる。

名前は「蘭」だ。蘭ちゃんは今もうすぐ7ヶ月になる。長そうで短い7ヶ月だった。この7ヶ月で大きく成長した。色々なことができるようになった。体重もズッシリ重くなったし、身長ものびた。そして何よりできることがたくさん増えた。最初は手を口につっこんでしゃぶることしかできなかった。でも月日がたつにつれてねがえりしたり、おもちゃで遊んだりするようになった。そして今は、手の前におもちゃを置くだけで、自分で取って遊ぶし、「ごうくん」とか「ママ」と言ったりすることができるようになった。とてもかわいしいし、いっしょにいると楽しい。そんな蘭ちゃんを生んでくれたお母さんにも感謝している。

この前、お母さんが泣きながら蘭ちゃんを生んでいるビデオを見せてもらった。少し見ただけで、むねがしめつけられる感じになった。

そして蘭ちゃんを生む何ヶ月か前くらい、お母さんがいっばいはいっていたことがあった。それは「つわり」と言って、赤ちゃんを生む前に現れる、はき気や食欲がなくなるような状態だ。お母さんはお飯もあまり食べなくなった。お母さんがはいているのを見て、ぼくもむねが苦しくなった。そんなたくさん苦しい思いをして、命をかけてまで妹の命を生んでくれたと思うと、命はつながっているんだなあと思えた。そして今、楽しく過ごしているのは、とても幸運なことなんだということも改めて感じた。これから妹にどんな成長してほしいし、いろいろなことチャレンジして、やさしい人になってほしいと思う。

親友ってなに

神倉小学校 五年



みなさんは、親友という存在を持ったことはありますか。私はあります。けれど親友がいるからと言って、いいことが毎日続くわけではありません。けんかをしたり、時には、約束をやぶられたり、からかわれたり、もういやって思うこともないわけではありません。「こんなのも分らないの」と一人で腹が立ったりしてあきれてしまったりする時もあります。けれどそこまで自分のことをわかってくれる人は、自分の理想の人だけであって、この人がそうなれば良いと押し付けたり、きついことを言ったりすることはおかしかな、そう今は思っています。

でも、昔はすぐにあきれたり、腹が立ったり、自分の理想の人と比べてすぐにきついことをいってしまったり、今考えてもあり得ないことをしてしまったりと後悔しています。その人とは毎日けんかをして、つまらないことで言い合いをしてしまいました。

その時は、親友の気持ちなど考えられなくて、ただ自分の好きなようにしてただけでした。たとえその人が、私の理想の人に一步近づいたとしても、その人は、自分のことを一つがまんしているだけです。そんなことは、その人のためではなく、私のために合わせているだけだと思えました。中には友達やめようと思ったり、実際に言ってしまったりしたこともありましたが、そんな簡単に、ちょっとしたけんかのためだけに、今まであった楽しいことや、今まで作ってきた思い出をむだにするようなことをしていいのかと思えました。言われた人は、ごめんなさいではすまないほど傷ついてしまっているかもしれないと考え、今のよ

うに人のことを考えるようになりました。

今まで自分が一人になったことはないけど、けがしたり、困ったりしたときにすぐに助けに来てくれます。私は親友がいることが当たり前だと思っています。親友と親友じゃなくなったことはありません。私は以前してしまっただけで、親友にこんなことされたくないし、もうしたくありません。前みたいに後悔するかもしれないからです。

今話していることをしている人は、いつか自分がしていることを、本当に後悔すると思います。そして、親友が自分のことを悪く見てしまうことになるかもしれません。そのようなことが起きないように、これからも気を付けていきたいです。

未来

熊野川小学校 五年



未来がどういう風になっているのか全然わかりません。今私は五年生ですが、一年生の時は高学年の事なんか全然考えていませんでした。今でも中学生になった事や高校生になる事なんか考えた事ありません。もしかししたら、大人になったらすごい会社に勤めているかもしれないです。でも、未来がどうなっているかわかりません。今は、自分のやりたい事が、まだはっきりと見つかっていません。でも、とりあえず勉強をがんばりたいと思います。もしかししたら、中学校、高校で色々な体験をして、やりたい事が見つかっているかもしれないです。そして、そのやりたい事が出来たらすごくうれしいと思います。また、自分がやりたい会

社に勤めるとすごく楽しいと思います。なぜなら、自分のきれいな事をやり続けるのは、むずかしいと思うからです。だから、自分は、自分の好きな事をしたと思います。しかし、社会は、そううまくはいきません。生きていると自分のきれいな事もたくさんやらなければいけません。でも、その倍自分は楽しいことをしていきます。

今は、友達といっぱい遊んで、小学生だから出来る事、大人だから出来る事をいっぱいして生きていきたいと思っています。今は、自分が出来る事を精一杯していききたいと思っています。

個性



王子ヶ浜小学校 六年

個性とは、その人、またはそのものだけが持っている特別な性質のことです。

この世界には、多くの人がいます。でも、人類がうまれて、誰一人まったく同じ人はいないのです。双子とかでも、見た目が似ているだけで、性格まで同じではありません。少し似ていることはあるかもしれませんが、全く同じではないのです。好きになる人、好きな食べ物、得意なこと、苦手なことなど、すべてがすべて同じとはならないのです。

例えば、LGBTの方などがいます。LGBTとは、L、レズビアン（女性だけど、好きになるのは女性の方）G、ゲイ（男性だけど好きになるのは男性の方）B、バイセクシャル（みりょくてきな人なら女性でも男性でも好きになれる人）T、トランス

ジェンダー（心の性と体の性が違う人）のことです。ゲイは、ネタにされがちです。トランスジェンダーは、性同一性障害とも呼ばれています。

昔は、LGBTの方には、暮らしにくい世の中でした。今と違ってLGBTは、知られていませんでした。LGBTの方は昔からいます。でも、昔は、女らしさ、男らしさでしばられていました。今でも、高年層の方々は、ボーイッシュな身なりが好きな人にも、「女の子らしくしなさい」などと言ったり、同性を好きになっても否定してきたりするかもしれません。

女らしさ、男らしさより自分らしさが一番大事です。自分らしさを否定されたLGBTの方やLGBTではない方でも、自殺する可能性が高いと言われています。特に、LGBTの方、たとえばトランスジェンダーの人が親にがんばってカミングアウトしたとします。でも、親に否定されてしまいました。そうしたら、トランスジェンダーの人は、居場所がなく誰も受け入れてくれなくてつらいと感じるでしょう。カミングアウトしたのに、否定されたら、本当に居場所が消えたと思って自殺してしまうかもしれません。だから、相談されたら、どんなことでもいったん受け入れてあげると良いと思います。また、相談しても否定されたら違う人に相談するといいです。

私は、みんながもっともっと暮らしやすい世の中になってほしいです。LGBTの方だけでなく、私たちみんなが平等に暮らせる世の中になってほしいです。LGBTの方たちのことも、みんなが認め、それも個性の一つだと言えるような世の中になることを私は願っています。

SNSと誹謗中傷

三輪崎小学校 六年



今、SNSでの誹謗中傷がニュースなどで話題になっています。誹謗中傷という言葉をよく耳にするきっかけとなった出来事があります。それは、一部のネットユーザーが特定の芸能人などに対して一方的な批判を行い、批判を受けた芸能人がたえきれず自ら命を絶ってしまうという事でした。

なぜこのような事が起きるのでしょうか。その原因をぼくは「匿名」という機能があるからだと思います。ネット上で顔を見せず、大勢のユーザーと一緒に芸能人にとんでもない数の罵詈雑言を送りつける。そんな世の中はおかしいと思います。

では、このような事が起きないようにするためにどうしたらいいのでしょうか。ぼくは度が過ぎた誹謗中傷をした人に対して、顔写真の公表、実名報道などをもっと厳しくするべきだと思っています。そして一度世間から批判を浴び、こんなに辛いんだと思ってほしいです。でも、ここでまた問題があります。それは、誹謗中傷を行った人に対してまた誹謗中傷が行われるのです。ここでぼくが思ったのは、

「これって誹謗中傷される人が変わっただけで、同じ事のくり返しじゃないのかな。」ということでした。

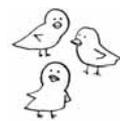
でも今この瞬間にも、世界のどこかで、だれかが誹謗中傷を行っているかもしれません。それはとても悲しいことです。しかしぼくはこの問題をなくすことはとても難しいと思います。それでもこの問題を一件でもなくすためには、一人ひとりの意識が大切だと思います。「一つの言葉で人を生かすことも傷付けることもで

きる。」

ということをいつも心がけていくことで、自分の発言に責任をもち、直接顔の見えない相手にも優しくできるはずです。

親切と笑顔

高田小学校 六年



みなさんは、親切にされてうれしいと思っただけですか。私はこれまで、たくさんの人に親切にしてもらいました。例えば、遊びにさそってくれたことなどです。また、親切にしてあげたこともあります。例えば、物をひろってあげるなどです。そんな小さなことでもいいの、と思うかもしれません。小さなことでもいいのです。

まず、なぜ親切にするのでしょうか。私は、相手の笑顔、ありがとうという言葉がうれしいからだと思います。それにいい気持ちになるからだと思います。親切にしても自分にいいことはないのではないかと、思う人もいるかもしれません。しかし、たくさんあります。例えば思わぬところで物をくれたり、それをきっかけに仲良くしたいと思っている人と友だちになったり、親切にしたことは思わぬところで表れるものなのです。

私は四年生のときに東京に行ってきました。そのときに知らない人に親切にもらった時のことをよく覚えています。それはデパートのような大きな施設の水道を使った時のことでした。私だけでお手洗いに行った時に、手を洗おうとしました。しかし私が使ったことがないような蛇口があったのです。どうやって出せ

ばいいのか分からずあたふたしていました。そのとき、となりにいた女の人が「こうするんだよ。」と教えてくれました。親切にしてくれてとてもうれしかったし、私も助けてもらった女の人のような親切な人になりたいと思いました。

他にも東京でお母さんがしていた親切についても心に残っています。それは、化粧品やせっけんなどを売っているコーナーでテスターのような物がありました。そこに外国人の人がせっけんを試していました。そこでその人はどこに水があるのか困っていました。それを見たお母さんが手で水のある場所を教えてくださいました。それを見た私は、日本語は通じないから手でやることはとても良い表現方法なのだと思います。

次にみなさんは、どのような気持ち、顔で親切にするとよいと思いますか。めんどくさそうな顔、笑顔、どちらのほうがうれしい気持ちになるでしょうか。私は笑顔だと思います。また、いやな気持ちで接する、楽しい気持ちで接する、どちらの方が自分も良い気持ちになれるでしょうか。それはもちろん楽しい気持ちですね。このように笑顔、楽しい気持ちで接すると相手も、自分も、いい気持ちでいられるのです。

私は来年、中学生になります。中学生になるときと、勉強で分らないことや、部活動で困ることができると思います。そのようなことが起きた時はきつといろいろな人が親切にしてくれるでしょう。また、困っている人がいたなら、助けてあげたいです。

最後に、私はよく人に助けられるけれど、困っていると親切にできる、たよられる人になりたいです。

中学生の部

誹謗中傷

光洋中学校 一年



最近、私は「誹謗中傷」という言葉をよく耳にする。私が初めてその言葉を聞いたのは「木村花さん」が亡くなったニュースだった。花さんはテレビにも出演していて、明るい人に見えた。死因はネットからの「誹謗中傷」。世界中の人から生きていることが苦しくなる程のひどい言葉を投げつけられていた。花さんのことを私はすごいと思う。テレビに出るということは、世の中の様々な人に見られるということ。この世の中は調べると本名などが特定される事もまれにある。このようなリスクのある事に勇氣を出し挑戦した花さんは素晴らしいと思う。なのに、その怖さを知らないのにネットという顔の見えない所で、隠れながら頑張っている人にひどい言葉を投げつけて、なんとも思わないのか。私は同じ人間なのに、そんな人がいるのが悲しいです。人は皆、考え方は違うというけれど、この様な感じ方、考え方の違いは「ちがいはないと思う。色々な見方はあるけれど、勇氣を持ち頑張っている人に対し「やめる」「お前の顔を見たくない」という言葉を投げつけることで、その人が更に努力して変えるとか、そういうのではありません。一人一人その言葉への感じ方が違うから。そして、最悪の場合には「自殺」という選択をする人も決して少なくありません。

私は「いじめ」も誹謗中傷に似ていると思います。「いじめ」にも色々なケースがあり「LINE」で集団の「いじめ」が最も

誹謗中傷と似ている。私は受けたことはないが、今、中高生を中心に被害は増えつつある。

私はこの2人の社会問題から一つの共通点を見つけた。その共通点とは「集団」だ。別に集団では無かったとしても「いじめ」はいじめだ。だが、どうして集団になるのだろうか。私は疑問に思った。その答えは人間の性質というか、心理的な物が関係しているとは私は考えた。それは「共感する人がいると安心する」という心理的な物だと思う。例えばテストで一問、半信半疑な回答があったとする。テストの終了後、友達と回答が同じだといずれ間違っていたとしても少しの安心は持てる。私の体験を踏まえ考えたら、誹謗中傷も一人のその一言から始まり「共感できる人がいる！なら、書いても大丈夫だよな。」という人がだんだん増えていく・・・という流れだ。自分は間違っていない、とか共感者がいるから大丈夫などという軽い気持ちで書いたつもりの言葉が人を追い込むのだ。

実際に「木村花さん」が亡くなったとき、自分の書いた言葉をほとんどの人が削除したらしい。私の頭の中には、「ひどい」という二言しか出てこなかった。自分どれほどの大きな罪をおかしたのか。人が亡くなってからやっと気付いたのでしよう。ネット上ではその花さんを追い込んだ言葉は消えたとしても、きっと花さんの心には刺さり続け、決して消えない。忘れられない物だと思えます。たった一言が花さんの人生を閉ざしてしまった。書いた人達はきっと「亡くなる」とは思ってたか」と思うんだろう。自分の言葉が・・・なんて考えもしなかったんだろう。これがネットの怖さだ。

制服について

緑丘中学校 一年



私はスカートがあまり好きではありません。なぜかというところ、ヒラヒラして邪魔だし、ズボンより動きづらい、それに冬は寒いからです。けれど、中学生では小学生のときとは違って制服があります。そして、女子の制服はスカートと決められていて、ズボンという選択肢はありません。なぜ、女子はスカートなのでしょうか。自分で好きに決めることはできないのでしょうか。

東京や大阪などの都会では、既にスカートとズボン、どちらか好きな方を選ぶことができる学校もありますが、私に通っている学校では、まだ気軽にズボンを選ぶことはできません。私はズボンをはいて学校に通いたいの。私の学校でも自分の意思で、自由にスカートとズボンを選べるようにしてほしいです。

今のままを変えるには制服についてのアンケートなどを取る必要があると思います。みんなが制服に対して、どんな考えを持っているのかということを知ることが必要であると私は考えています。

制服にズボンはおかしいと考える人達もいると思います。今はそれが当たり前じゃないからです。「当たり前じゃないからおかしい」と感じる。おかしいことではありません。でも、もしどちらでも良いという考え方が全国各地に広まっていけば、スカートの両方どちらでもなくできるよう。そうして、スカートとズボンの両方どちらでもなくことができるのが当たり前になれば、ズボンがおかしいと思う人も、いなくなるのではないのでしょうか。

インターネットで調べていると、スカートやズボン以外に、リ

ボンかネクタイかを選べる学校もあると知りました。とてもいいなと思いました。自分で選べるのが当たり前になっていったらいいなと思います。

女子生徒が当たり前前にズボンをはけるようになる社会は、将来的に近いと思っています。

新宮市でも、スカートとズボンが選べるように早くなってほしいです。

男女差別と人権

城南中学校 一年



今の日本は男女関係なく、様々な仕事に就く事が出来ます。しかし、その裏で性別での差別がまだあります。私は「男性だから」「女性だから」の考え方を無くしたいと思っています。

昔は、男性は外で働いて、女性は家事をするのが当たり前の中でした。それに対し、現在は、女性が外で働いて、男性が家事をしたり、男女関係なく同じ仕事をするケースがあり、「男女平等」の世の中です。一方で新たな差別による人権侵害も増えています。

まずは、女性の差別の問題についてです。女性の場合、昔のがい念にとらわれて「外で働きたいのに働けない」というケースがあるそうです。この考えに私は反対です。確かに数十年前の日本では女性が専業主婦として家事をするのが当たり前だったかも知れません。しかし、現在は女性も外に出て男性と同様に仕事をする時代で、様々な職種に女性が就くようになり、女性がいるから

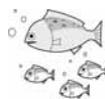
こそ新しいものがつくられています。つまり、現在の社会で女性の存在は大きいのです。そんな中、外で働きたくても働けない環境をつくるのはおかしいのです。大人には働く権利があります。それを「女性だから」という理由で無視するのは人権侵害にあたります。あともう一つ、学校の校長先生や会社の社長の立場にいる人は女性より圧倒的に男性の方が多いです。ここから、まだまだ社会では男性の方が優遇されていることが分かります。女性も同じように仕事をしているのに、なかなか昇格できない悲しい現実を早く変えていかなければなりません。

次は、男性の差別の問題についてです。最近では元々女性がついていた職業に男性が進出してきます。その例として、看護師や保育士、ベビシッターなどがあげられます。しかし、「男性だから」という理由で笑われたりされたりするケースがあるそうです。これは完全なる「差別」です。特に保育士やベビシッターなどの小さい子供と関係のある職業では、実際に子供が性的被害を受けた事例が多く、ニュースでもたまに報道されます。でも、世の中には本当に「子供が好きで」とか「人の役にたちたい」という理由で女性が多い世界で頑張っている人がたくさんいます。そういう人達からしたら、きっとこの現実はとても悲しく辛いです。私も頑張っていることに対してバカにされたり、さけられたりしたらとても心が痛いのです。だから一度、女性ばかりの世界で働いている男性への見方を考え直してみましよう。

男女差別としてあげられている事例はまだあります。そして、それで苦しんでいる人はたくさんいます。もしかしたら私達は、無意識に「男だから」「女だから」といって差別してしまっているかもしれません。一度、日々の生活を思い返してみて下さい。そして男女差別を一刻でも早く無くしましょう。

性について

高田中学校 一年



ホモセクシャル、バイセクシャル、Xジェンダーなどこの世には、様々な性を持つ人がいます。最近ではテレビで取り上げられる機会も増え、理解が深まっていますが、たった三年ほど前までは、差別が絶えませんでした。

「自分は同性が好きだ。」と言えば知らない人から暴行を受ける、という事件がありました。他にも16歳以下の同性愛者が、カミングアウトするのを禁止しました。親、教師、心理学者でさえも同性愛を肯定すれば違法になる。これらはロシアで実際にあった話です。私はこの話を聞いた時、開いた口が塞がりませんでした。

人が人に恋をしているのがそんなに悪いことでしょうか？それがただ同性だっただけで。

海外の短編映画「LOVE IS ALL YOU NEED?」という作品は、もし同性愛が「普通」だったら？という世界で展開するストーリーです。主人公はそんな世界の中、異性に恋してしまいます。そんな彼女は異性愛者だということがまわりに広まっています。そんな彼女を受けています。多数派が少数派をいじめる、この形は変わらないのでしょうか……？とても興味深い作品なのでぜひご自身で観てみてください。

性は同性愛だけではありません。

「バイセクシュアリティ」とは両性愛のことで男性にも女性にも恋することができる方を言います。性別関係なく人を愛せるってとても素敵ですよ。

他にも、男女のいずれか一方に限定しない性別の立場を取る人、Xジェンダーとも言います。これらをまとめて「LGBT」「性の多様性」「性のアイデンティティ」と言うそうです。

LGBTだから悩んでしまう人がいて、言い出しにくい環境を作ってしまったと考えると考えると心苦しくなります。ですが、私一人だけが主張しても世界に与える影響はこれっぽっちもありません。悔しいですが私ではどうにもならない事実です。しかし、この作文、私の言葉で、数人でもLGBTについて考えてくれる方が増えれば、私の弱い力で一ミリでもLGBTへの理解が深まればと思います。

学校で着る制服は、女の子がスカート、男の子はズボンと決められていますよね。何故でしょうか。色々と理由はあると思いますが、決定打になっているのは、性のあり方ではないでしょうか？

女の子は可愛くなければならぬ。
男の子はかっこよくなければならぬ。

皆さんは考えたことがありますか？何故、自分がその格好をしているのか。もちろん「POの問題でもあると思います。ですが逆ではダメなのでしょう。なにがいけないのでしょうか。それは私たちの中で無意識に働いている、固定観念があるからではないでしょうか。

根本的な所を見れば、まだまだ性について考えるべきところがあるのではないのでしょうか？

「もっと明るい色の服着たら？」いとこと買い物に行った時の事でした。私は黒や白など、地味な色が好きなのですが、そんな私にいとこはたぶんアドバイスのつもりだったのでしよう。ですが私はなぜか、とても悲しい気持ちになりました。いとこがそう言ったのは私が「女」だからなのだと思います。女の子だから可愛い服を着てほしいという好意だったのでしよう。

母、父ともに「LGBTへの理解があり、以前母に、「私が女の人と結婚したらどうする？」と質問したら「あなたが連れてくる人が家族だよ。」と言ってくれました。その時の感情はどうにも言い表せないものでした。

否定されると胸が痛みます。けれど、それ以上に肯定されたときが一番胸に響きます。誰がなんと言おうと、私は母の言葉を忘れません。皆さんも忘れないでください。肯定してくれる人が少なからずいるという事を。自分を否定しないでください。

差別や偏見が全く無くなった訳ではありません。今でもLGBT関連でいじめなどがあるのも事実です。ですが確実に私たちは「LGBTの方たちに寄り添って来ているのではないのでしょうか？みなさんも考えてみてください。

心で手をつなごう



近畿大学附属新宮中学校 二年

人権とは？。それは「人間が人間らしく生きていく権利で、すべての人が生まれた時から平等に持っている権利」である。言い換えると、「すべての人が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」とも言えるだろう。世界のどこに生まれたとしても、肌の色や目の色が何色でも、性別がなんであれ、どんな人でも、誰にも命を脅かされることなく自由に、そして幸せを求める権利があると国連の「世界人権宣言」にも記されている。しかし、今その生命、自由、幸福が奪われるという事態が起きている。新型コロナウイルスだ。二〇一九年十二月以降に発生し、短期間

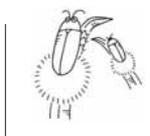
で全世界に広まった。二〇二〇年十一月二十七日現在、全世界での感染者数は約六〇七十一万人にのぼり、死者は約一四二万人となっている。明確に解明されていない部分が多々あるコロナウイルスは今や世界中を震撼させている。その中でも今回人権作文を書くにあたり、私が最も目を向けたのは、新型コロナウイルスと最前線で戦う医療従事者に対する差別や偏見である。例えば、ある国では看護師が襲撃され、石を投げられ、漂白剤をかけられ、家から追い出され、唾を吐かれ、乗車拒否されたという事例がある。また、日本でも医療従事者やその家族への差別やいじめ、そして保育所などが医療従事者の子供の預かりを拒否するという恐ろしいことが起きている。こう書くだけで手が震え、胸が重く痛い。このようなことが起きていると聞いた時、信じるのが出来なかった。コロナウイルスの戦いの「英雄」である彼らになぜ危害を加えるのか理解できない。そんな中、私はあるニュースで、医療従事者が新型コロナウイルスに感染した患者を抱きかかえて介抱するという映像を見た。その時、その映像に釘付けになってしまった。誰もが恐れおののくコロナウイルスになぜここまで、果敢に立ち向かうことができるのか。私には決してまねできない。感染してしまうかもしれない恐怖に押しつぶされ、自分を守ることしか考えられず逃げ出してしまっただろう。しかし医療従事者の方はその恐怖に全力で立ち向かいながら、目の前の患者さんを必死で助けたい。その深い深い思いやりには、尊敬、そして感謝しかない。彼らがいなければ、今の世の中は保たれていないだろう。医療従事者がいなければこの世界はどのようなようになってしまっただろうか。この心から尊敬すべき人々になぜ傷つけるようなことをするのか。私はこの原因として、新型コロナウイルスが猛威を振るう今、生活が制限される中で、前述の生命、自由、幸福などの余裕が無くなり、人々の人権が満たされていないからではないかと

思う。だから、絶対にしてはいけない差別などの行動に走ってしまふのではないか。しかし、このような状況だからこそ、人と人が協力し互いに尊重し合うことが必要だと思う。

全世界が一丸となる時だ。人類とウイルスとの戦いに勝つには、人類や性別で差別をしている場合じゃない。心と心で手をつなぎ、全人類が力を合わせれば、コロナウイルスよりも大きな力が出せるはずだ。それができればウイルス収束への希望の道すがら広がっていくに違いない。私はコロナウイルスを一つの歴史として終わらせてはいけなと思う。これとどう戦い、どう勝利したかを後世に伝えなければならぬ。それが平和を築くカギになるだろう。この苦難から学べることもたくさんあるはずだ。医療従事者への感謝や思いやりの気持ちを持ち続け、世界中の人々の自由、幸福がいち早く戻ってくるよう、皆と協力しながら、感染予防に努めていきたい。

インターネットを考える

熊野川中学校 二年



最近テレビやインターネットの記事でよくインターネット内ではじめられたり、たくさんの中傷の文章で自殺する人のニュースを見かけます。私はスマホを持っていて、実際にコメント欄で悪口が書き込まれていたり、本当なのか怪しい情報がかかれていたりしているのを見ることがあります。そんな私にとって一番身近な「インターネットを悪用した人権侵害をなくそう」という、日本政府が掲げる人権問題について考えました。

「インターネットを悪用した人権侵害」にはどのような問題があるのか調べようと、法務省のホームページで見ると、そこには私が想像していた以上のたくさん問題があることを知り、「インターネットを悪用した人権侵害」を身近なもので知っているつもりになっていたことに気付かされました。

内閣府が平成二十九年に調査した「インターネットによる人権侵害に関し、現在、どのような問題が起きていると思いますか」という質問で一番多かった回答が、六十二・九%の「他人を誹謗中傷する情報が掲載されること」です。誹謗中傷とは根拠のない悪口を言いふらして、他人を傷つけることという意味です。その人のことが好きじゃないからということだけでうその情報を流す人はたくさんいます。ネットで芸能人を検索すると大体本当なのか怪しい情報が出てきます。こういうのを見るとこんなことをして楽しいのだろうかと思えます。私だったら嫌いな人のことを考えるより面白かったこと、楽しいこと、好きなもののことを考えたいです。でも人には色々な考え方があります。自分と考えかたが全然違う人だっていてもおかしくありません。誰にだって、苦手な人や嫌いな人はいます。けれどその人に対する怒りなどをその情報を流して発散するのは違うと思います。ネットはストレス発散で悪口やうその情報を流すためにつくられたものではありません。私はイライラすることがあったら日記を書いて気持ちを整理しています。日記を書いていると、誰かに話を聞いてもらった気分になります。

こんな風に自分だけでストレス発散できる方法をのびのび以外で知っている人が増えたら、ストレス発散のためにうその情報を流す人が減ると思います。

今の時代、自分のスマホを持っている人の割合がどんどん増加してきています。ある資料によると二〇一三年の十代のスマホ利

用率は六七・三%でした。しかし、二〇一九年になると八十九%とほとんどの人が利用していました。たったの六年でこんなにも利用率が増加していたことに驚きました。私は小学六年生の頃に、お母さんの使ったスマホをもらいました。その頃はメールで友達とやりとりができるようになって喜んでいました。でも、時々みんながラインの会話の話になると話に入ることができなくて中学一年生でラインを入れてもらいました。私は平日一時間、休日二時間ぐらい合わせてラインをしています。

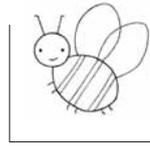
ラインは一気にみんなに伝えることができたり便利ですが、便利だからこそ気をつけたいことがあります。例えば、自分が送った文をどういう風にとらえられているか分りにくことや、相手が思っていることが、分りにくいことです。表情と声がないと自分が思っていたことと違う意味にとらえられてしまうことも多くなると思えます。ラインを送る時はいつも話すのをそのまま文字にすると勘違いさせてしまうかもしれません。私はまだラインで嫌な思いをしたことがありませんが、私が嫌な思いをさせたことはあるかもしれません。高校生になるとお互いのことを深くは知らないままラインをすることがあると思います。中学生の頃と違い相手をあまりわかっていないので今よりもよく考えて送ったり、読んだりしないといけません。

一回悪口などを書いてしまったら次もまた書くようになります。その悪口を見た人は当然傷つきます。そしてどんどん追いつめられて最悪の場合、自殺してしまうのです。自分の書いた悪口ぐらいで自殺するわけないと思っと思っています。でも、そういう人が何人もいて悪口をいくつも書き込むから自殺はなくならないのではないのでしょうか。画面越しだと忘れそうになりますが、画面越しでもそこにいるのは人です。それを意識していても誰かを傷つけてしまうことはあると思います。人の考え方はそれぞれです。

誰がどの言葉に傷つくか分からないからインターネットは難しいです。今回私は「インターネットを悪用した人権侵害」を考える中、一人一人の気持ちにより大切だと感じました。まずは画面を通しての会話が増える中だからこそ、思いやりの心を忘れずインターネットなどを利用するべきだと思います。

手話の大切さ

光洋中学校 二年



児童館には、年に一回「手話教室」があります。私は、六年間「手話教室」に通っていました。

そのきっかけとなったのは、私が小学一年生の時、私の母の友達とその友達の娘さんに会いました。娘さんは双子なのですが、二人とも耳が不自由で、耳に補聴器をつけていました。二人は手話で笑顔で明るく話してくれました。でも私は、手話がわからなかったので、あまり話をする事が出来ませんでした。この時私は、手話を学んで、二人ともっと話をしたいと思いました。

私が六年生の時、「手話教室」で実際に耳の不自由な方とお話をしました。私は「好きな食べ物は何ですか。」と聞きたかったのですが、なかなか手話ができなくて困っていたら、相手の方が、「ぶどうです。」と返事を返してくれました。なんでわかったんだろうかと思っていたら、手話の先生が「口の動きを見て、答えてくれるんやよ。」と教えてくれました。手話を覚えるのも大変なのに手話がわからない人たちのために努力してくれているんだと感じました。私自身ももっと努力しなければいけないと思いました。

六年前、24時間テレビで、耳の不自由な12歳の少女がチャリディングに挑戦しているのを見ました。音楽が聞こえないため、音に合わせてリズムを取るのが難しく必死に練習していました。でも、チャリディングの部員たちが、紙にポイントやタイミングを書きあったり、練習する日の前日に手話を覚えてきて、自己紹介をしていました。みんな楽しそうに心が温かくなりました。そしてこれを見ていた時、私はあることに気づかされました。

一つ目は、障害者だからといって気を使うのではなく、みんなと同じように接することです。耳が不自由だから、目が不自由だからといって、変に気を使うのではなく、普通に接すれば、障害者も気持ちが良いと思いました。

二つ目は、どんな時でも笑顔でいることです。辛い表情や悲しい表情をしていると、耳の不自由な人たちにとったら、どうしたんだろう、私のせいかなと思ってしまうかもしれません。でも、笑顔でいることで、安心して楽しく過ごせるし、障害者の人たちが明るい未来を生きるために大切だと思います。

私は、これらのことを忘れずにいつまでも続けていこうと思います。そして、手話ももっと練習して、手話に関わるお仕事がしたいと思いました。音が全く入らない生活を想像したり、どんなことが困るか想像したりと、聞こえない人たちの立場になって、聞こえない人たちの気持ちを理解し、皆さんに少しでも手話に興味を持ってもらい、手話の大切さや楽しさを知ってもらいたいです。

二人の私

緑丘中学校 二年



私は今年で十四歳。そんな私は最近、ちょっとしたことでもイラする。家族の何気ない一言。先生からの注意。以前は家族のそんな一言で笑い合ったり、先生からの注意も素直に聞いたりできていた。けれど、最近そんな些細なことに腹が立つ。周りの大人たちはみんな私のことを思ってくれている。それは分かっている。でも、何故か素直になれない自分がいる。一体「些細なこと」で腹が立つ「自分」は本当に「自分」なのだろうか。

それと、最近の私は素直に感情を表現することができない。以前なら、飴をもらうと素直に喜べた。けれど最近では以前のように素直に喜べなくなった。心の中では喜んでいのに、それを顔や言葉に表すことができない。何故かそれが、今までできていたごく普通のことだ。恥ずかしくてできない。

この前、母に注意されイライラしていた私は母に向かって「うるさいよ！」と言ってしまった。言ってすぐに言い過ぎたと後悔した。でも「ごめん」というたった三文字を言えなかった。せっかく私のことを思ってくれたのに。注意してくれて嬉しかったのに。最近の私はいつもこうだ。もうこれと同じことを何回繰り返してきたのか。そしてその度に、次こそは素直に謝ろうと何回思ってきたのか。それなのに私はそれを思ってきた数だけ言えなかった。

まるで「私」という一人の人間の中に、二人の「私」がいるみたいだ。そして、その二人の「私」は一体どちらが本当の「私」なのか。「素直な私」なのか、「素直じゃない私」なのか、いや、

「両方とも私」なのか、あるいは「両方とも私ではない」のか。少なくとも、「友達」といふときの「私」と「家族」といふときの「私」では明らかに違う。友達も「一つの体の中」に「二人の自分」がいるのだろうか。もしそうならば、普段私が話している「あの子」はどっちの「あの子」なのだろうか。

今この作文を書いている私はどっちの「私」だろう。それに今の私は「大人」なのか「子供」なのか。年齢は子供だけど、思考なんかは大人に近い。私はもう自分のことを子供じゃないと思っているけど、周りの大人たちはまだまだ子供だと思っている。親に「もう子供扱いしないで。」と言うけれど、「親にとって子供はいくつになっても子供。」と返される。(いや、確かに私はあなたたちの子供だけだね。親はいくつになっても「親」で、子供はいくつになっても「子供」なんて、そんな当たり前のこと分かっているよ。でもね、そういう意味じゃないの。小さい子みたいに扱わないでってことなの)と、親がこれを言う度に、私は毎回こうやって心の中でブツブツ文句を言っている。何で分かってくれないのかなと。

年を重ねるごとに、大人に対して口数が減っていく私。そんな私を毎日育ててくれている両親。平日は家族よりも長い時間、私たちに接してくれている先生方。他にもたくさんの大人に支えられ、私は生きている。毎日たくさんの優しさに包まれて、日々過ごしている。そんな支えられてばかりの私にできること。それは、「ありがとう」を伝えること。素直に「ごめんなさい」と謝ること。これだけ助けてもらっているのに何もしないというのは、「ありがとう」や「ごめんなさい」を伝えることよりも恥ずかしいことだと私は思う。

私は今年で十四歳。大人のように、まだ子供の私は今日もたくさんの大人たちに支えられ、生きている。今日こそは伝えたい。

そして、どんなときも素直に伝えられるような「大人」になりたい。

差別と偏見のない世界

近畿大学附属新宮中学校 二年



最近ニュースでよく耳にする「人種差別」。人種差別とは、「人種的偏見によって、ある人種を社会的に差別すること」です。六月にアメリカのミネソタ州ミネアポリスで、白人警察官に膝で首を押さえつけられ黒人男性が死亡した事件をきっかけに、ほぼ全米で抗議デモが広がりました。ニューヨークでも抗議デモは広がり、いまや人々は「ソーシャルスタンス」も取らず、抗議デモに参加しています。日本でも、この事件に対し人々が「Black Lives matter (黒人の命も大事)」と唱える抗議の波が広がっています。世界で起こっている黒人、白人の差別はこれだけではありません。二〇一八年の統計によると、平均的な黒人労働者の収入は白人労働者の平均の六十二%にしかならず、これは歴史的に改善されていない問題であり、黒人労働者の平均収入が白人労働者の七十%を超えたことは一度もありません。このため、白人アメリカ人は黒人アメリカ人の六倍の人口がいるにもかかわらず、保有する資産には十七倍もの差があります。また、ワシントンD.C.では黒人人口がほぼ五十%なのに対し、警察官が殺害した死者の八十八%が黒人アメリカ人に対するものでした。他にも、ニューヨーク警察が二〇一九年の間に呼び止めて職務質問をした件数のうち、七九八一人が黒人なのに対し白人は一二一五人のみ、など

の人口の割合が少ないにも関わらず異常な数値を出していたりするので。このように、世界には見えない規則や偏見が存在しているのです。また、トランプ大統領が大統領選の為、白人層の支持固めを優先し、非白人の女性議員に「国に帰っては」と促したり、著名な公民権活動家に対して「彼は白人や警官を憎んでいる」などと非難し、アメリカ国内でも黒人への差別が深刻化しています。しかし、このような差別は日本国内でも発生しているのです。例えば、女性をはじめとしたジェンダーの問題や子供、高齢者に対する人権、障害者、ハンセン病などの感染者、アイヌ民族に対する人権問題です。学校の中での「いじめ」もその内の一つです。日本の小、中、高等学校において、いじめは年間約七万五〇〇〇件以上起こっています。そのため、平成三〇年度では児童生徒の自殺者が三三二人にもなっています。これらは現在、重大な問題となっており正しい知識や教育、といった差別をなくしていくための対策が求められています。

今や「Black Lives matter (黒人の命も大事)」だけでなく、「White Lives matter (白人の命も大事)」「All Lives matter (すべての命が大切)」のように、生まれた場所や肌の色に関係なく、全ての人の命が平等に大切であるということを訴えている人が三〇〇〇万人近くいます。

命には黒も白ありません。命には性別も関係ありません。どんな命でも、それぞれが大切な命に違いありません。粗末にしていい命など、この世界にたった一つもないのです。一人でも多くの方が、一つの命の重さ、尊さについて改めて考え、大切に扱ってくれることを心から願っています。

インターネットが引き起こす誹謗中傷の恐ろしさ



城南中学校 二年

現代、機械化が進み、誰もが利用しているインターネット。インターネットは、スマートフォンやパソコンで簡単に利用することができ、私たちにとって、無くてはならない存在となっている。おそらく、インターネットと関わらずに生きていける人はいないのではないだろうか。

そんな便利なインターネットは、使い方を間違えると、人を傷つけ、時には「凶器」となってしまうのだ。

私は先月、テレビで、SNSの誹謗中傷を受けたAさんがインタビューを受けているところを見た。Aさんは、新型コロナウイルスの感染者で、感染したらどうなってしまうのか、また、どうしたらいいのかをネットを通して、多くの人に伝えたかったという。しかし、Aさんには、コロナウイルスに感染したことを公表したため、多くの中傷コメントが寄せられた。それは、「お前は菌だ」「中国へ行け」などの醜いコメントだった。

私は、これを見て、許せないと思った。なぜ、自分が言われたら傷つくであろう発言を知らない人に言えるのだろうか。例えば、皆が自粛して三密を避けている中、Aさんが何の対策もせず旅行に行き、感染してしまったら、「帰ってくるな」と言いたくなる気持ちには分からなくもない。しかし、自粛して気を付けていたが感染してしまったことを、勇気を出して公表したにもかかわらず、その人に対して、中傷コメントを書くのは、あまりに短絡的だし、人権問題にもつながると思う。

私がおも、このような目にあったら、死にたくなると思う。実

際、自殺を選んでしまう人も少なくないと思う。だから、私は、SNSに自分のことを投稿したくない。心ない第三者によって傷つけられる可能性があるからだ。また、インターネット上に一度投稿してしまうと、全てを完全に消すことはできないそのため、投稿する前によく考えるべきだと思う。

そして、コメントも消すことができない。

たとえ、匿名であっても、手続きをして調べさえすれば、書き込んだ人を特定することが可能だからだ。「匿名だから分らないし、何を書いてもいいだろう」という単純な考えはしない方がいい。

醜い中傷コメントで、傷つき、死ぬことを選ぶとする人は山ほどいると思う。しかし、他人の一言で死ぬというのは、自分がかわいそうではないだろうか。そして、家族や友達も傷つき、悲しむと思う。「なぜ、相談してくれなかったのか。死ぬほど嫌なら相談してくればよかったのに。」と。

家族や友達を頼って欲しい。その人たちはきっとあなたを助けてくれる。一人で抱えずに話してほしい。もし、嫌だったり不安だったりするならば、手紙や電話でできる相談窓口だってあるのだから。

インターネットは、私たちの生活にかかせない物となり、「私たちの一部分になっている」と言っても過言ではないだろう。しかし、使い方を間違えると、人を傷つける「凶器」となることをこの作文を書くことで改めて学んだ。だから、これからのインターネットの使い方に気を付け、多くの人にインターネットとの正しい付き合い方を伝えていきたいと思う。

もう一つの選択肢

高田中学校 二年



私は、中学生になってから悩むことが増えた。それは、とても些細なことであったり、まあ、人に共感してもらえらるだろう、というようなことだったり。大きいことから小さいことまでたくさん悩んだ。そして、悩むことが増えるにつれて、「学校に行きたくない」と思うことも増えていった。欠席未遂も何回かした。

だから、一度学校を休んでみることにした。最初は、ダラダラとした事をしてのんびり過ごそうと思っていた。

でも、実際のその日は違った。掃除をして、前から作ってみたいかったパンケーキを作って、自分が食べたいお昼ご飯も作って、ダンスの練習もした。すごく充実した一日だった。気分も驚くぐらいにスッキリしていて、

「メッチャいい一日やったなー。」
と言えるくらい気分が良かった。

そんな充実した日から、私は、
「逃げることも大事やな。」

と思うようになった。やらなければいけない事や、やりたくない事に一度背を向けて、やりたい事をやる。

でも、たまに思う。こんな悩みで足を止めても良いのか。もっと大きな悩みを持っている人は絶対について、こんな私が学校を休みたいなんて言っているのだろうか。後になると凄いネガティブ思考だ。でも、その時はそんなネガティブ思考に陥る位悩んでいるという事だ。

みんなは、世の中学生の悩みランキングナンバーワンの悩みを

知っているだろうか。それは「いじめ」である。

確かに自分がいじめられたり、いじめが起こっている場面に遭遇したら凄く悩むだろうし、色々考えるだろう。だが、悩みは比べていいものなのだろうか。

私は、自分の悩みや思いを他の人と比べて優劣をつけるのは違うと思う。ネガティブ思考に陥るぐらい、学校を休みたいと思ってしまうくらい、悩んでいるのだ。悩みとは周りから計り知れないもので、後から考えたら小さく感じてしまう悩みでも、その時の自分にとっては凄く大きく重大なことなのだ。

だから、「いじめられてる人に比べれば。」

という風に自分の思いを蔑ろにしないで欲しい。逃げるのは恥ずかしいことじゃないし、休むのも、その時の自分には必要だ。

でも、「背を向ける」とか「休む」って思っているより難しい。だから、一日休まなくても、三十分遅刻して学校に行ってみたりするのはどうだろうか。三十分でも十分でも、心の休息をとることが大切なのだと思う。実際、私も少し遅刻して学校に行くことがある。案外、理解してくれる大人もいる。

理解してくれる人もいる、と知っていながらも不満に思うことが私にはある。それは、「大人の言動の矛盾」だ。私が学校に行きたがらなかった時、母とこんな出来事があった。

母は基本的に学力重視ではなく、普段

「じゃあ、学校休めば？」

と気安くいうタイプである。だが、実際に私が学校を休もうとすると、何とか学校に行ってほしいという思いが伝わってくるほどに、必死で私を説得した。

みなさんも、似たような経験はないだろうか。

「無理しなくても良いんだよ。逃げて良いんだよ。」

というようなことを言うくせに、いざ背を向けると、元の位置に

戻らせようとする。分かりやすく言うと、「不登校の子の話も聞かず、学校に戻そうとする人」だ。果たして、それは本当にその子のためになるのか。その子が満足するまで話を聞いてあげて心を休ませてあげるのが救いになるのではないだろうか。

もしかすると、大人の人も世間的な考え方や周りの目を気にして

「逃げる道をつくり、見守る」

という勇気を失っているのかもしれない。

こんな大人や自分の悩みに毎日みくちやにされている私達。そんな中で一つずつ答えや道を探す私達。

「めっちゃスゴいね。」

みんなに言いたい。

逃げるのも一つの選択肢。下を向くのも選択肢。はたまた勇気を出して一歩進んでみるのも選択肢。どれも、一つの選択肢でその中から一つ選ぶだけでスゴイ！「コレはえらい。アレはえらくない。」なんて無いと私は思う。

逃げてみるのも良いんじゃない？

どんな時でも協力し合える社会

近畿大学附属新宮中学校 二年



今、世界では新型コロナウイルスによって人権を無視したような発言、行為が各国で問題となっています。日本では、コロナウイルスに感染した人や、その濃厚接触者、医療従事者などに対する差別が問題となっています。そして、こういった問題に関連し

て新たな問題ができてしまったのです。それは、「マスクをしていない人の問題」と「感染者の多い国、県から来た人の入店、入室を断る」といった問題です。これは、感染が広まってしまったため、できてしまった問題だと僕は思います。僕はこの二つの問題について考えていると思います。

まず、「マスクをしていない人の問題」ですが、これはどういった問題かというと、マスクをしていない人を避けたり、マスクをしていない為、飲食店などの入店を断る、という問題です。僕はこの問題について、確かにマスク着用は必要だと思います。マスク着用を義務として決める国もあるくらいです。ですが、世界には体質や病気などでマスク着用が難しい人がいるのです。だから、マスクをしていない人を「避ける」というその人の人権を「軽視」するような行動につながってはいけないと思います。この問題が起こっている背景として、人の「感染したくない」思いが少なからずあると思います。この思いは「不安」であり、そういった思いと連日報道される情報が重なって、「避ける」といった人権を「軽視」する行動になるのだと思います。だから、その「不安」を解消するために大事なことは、マスクをしていない人に「不安」を感じるのではなく、マスク着用が難しい人もいるという、一人一人が「正しい知識」を持つことがこれからの社会に必要なのだと思います。

次に、「感染者の多い国、県から来た人の入店、入室を断る」という問題ですが、僕がこの問題で感じたことは、感染者の多い国、県の人々に対する「偏見」ができてしまっていると感じました。この問題は、店員側は「感染者の多い地域に住んでいるから、もしかしたら、感染しているのかもしれない」という先程の問題と同じ「不安」があるのだと思います。そして、そういった事が「偏見」へとつながっているのだと思います。この問題を解決

するためには、対策をしている人がいることを知ることと、一人一人が対策をすることによってようやく解決できる問題だと思えました。「感染者の多い国、県から来ているから危ない」という思いに直結させるのではなく、「対策をしている人もいる」という風に別の視点から見つめ直すことが大切だと感じました。そして、「対策をしている人もいる」と安心させる為に一人一人が対策をする必要があると感じました。このように一つ一つをこなしってこの「偏見」は無くすことのできるものだと思います。

最後に、僕がこの二つの問題から思ったことは、コロナウイルスによって今起こっている人権を無視、軽視したような行動や言動の原因として、「不安」と、それから来る「恐怖」が行動や言動につながっていると思います。今は「差別」や「偏見」をするのではなく、大切なのは、「協力し合うこと」だと思います。差別や偏見があると、コロナウイルスに立ち向かう為の「協力し合うこと」ができない為、このままではより一層、事態は深刻になり、差別や偏見も一層深刻になっていくと思います。だからこそ、僕たちは協力し合い、一つ一つの問題に向かって、解決していくことが必要になってきていると思います。僕は今からでも遅くはないと思うので、一人一人に協力が必要だと呼びかけていこうと思います。

差別について考えてみた

高田中学校 二年



今、世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るっています。私

達中学生も、四月から五月の間は、自宅授業という形を取らざるを得ませんでした。

連日報道されるコロナ関連のニュースの中で、私の目に留まったのは、「医療従事者やその家族に対する差別が起きている」というニュースでした。

私はこのニュースを初めて見たとき、怒りの感情しか浮かんできませんでした。医療従事者の人たちは、自分の生活を犠牲にしてまで、日々コロナと闘っているのに、どうしてそんな事ができるんだろう、そう思いました。

しかし残念ながら、このような差別は世界中に存在しています。コロナのケースも、それほどめずらしくないのです。

歴史を見てみれば、差別はどの時代にも存在していました。十九世紀、戦時下のドイツでは、ユダヤ人の大量虐殺が行われていました。ユダヤ人は、ただユダヤ人であるということだけ理由に、収容所に入れられて、殺されていったのです。収容所には、ユダヤ人のほか、ポーランド人、同性愛者、政治的反対派なども、数え切れないほど居たそうです。ヨーロッパ全体で殺されたユダヤ人の数は、六百万人にもなるそうです。

日本では、関東大震災の直後、「混乱に乗じた朝鮮人が井戸の水に毒を混ぜている。」というデマが流れ、それを信じた日本人が自警団を作り、朝鮮人を殺害した事件がありました。

この二つの事例は、同じ差別についてですが、少しだけ違う部分があります。

ドイツでの虐殺の裏には、当時のナチ党党首、アドルフ・ヒトラーの存在と、ホロコーストに無言の協力を行っていた市民の存在があったと言われています。しかし日本の例では、差別を行ったのは市民であり、そこに政治的思惑は関係していません。そしておそらく、後者は止めることができたと思います。当時ド

イツで圧倒的一強だった、ナチ党の動きを止めることはできなかったとしても、民衆から生まれた敵意なら、反対に民衆の力で止めることだってできたと思います。

私は、「差別を行うのは、どこかの権力者ではなく、私達である」と考えます。差別とは、特定の誰かが行うものではなく、大勢が集まったときに起こるものではないのでしょうか。

そしてこのことも踏まえて、差別をなくすためにはまず、「人々の意識を変える」ことが必要だと思います。特に日本人は、あまり差別というものに馴染みがないように感じます。出来事としては、知っていたとしても、どこか遠くの国で起きているものかと思っている人がほとんどではないでしょうか。見えていないだけで、世界には、そして日本にも、差別被害に苦しんでいる人がいるのですから、もっと身近な問題として捉えるべきです。多くの人がこの問題に向き合えば、差別も減っていくはずですよ。

私自身の話をすると、私の周りには差別で苦しんでいる人はいません。でも、周りに居ないから良い、で終わらせず、誰の周りの人も幸せでいてほしいです。そのための第一歩として、私はまず、差別について知ることから始めたいです。知っているのと知らないのでは大きく異なるはずですよ。

もしかしたら、差別を全てなくすことはできないかもしれませんが。それなら、未来の社会で差別に苦しむ人が一人でも減っていれば良いと思います。世界中の人々が、肌の色や宗教や考え方の違いを互いに受け入れ、尊敬し合うことができれば、全ての人が自分らしく生きられるのではないのでしょうか。そして必ず私達がそんな未来を創っていきます。

幸せのために

緑丘中学校 三年



今、日本に限らず世界中で新型コロナウイルスの影響による問題が起っています。私も最初はウイルスを軽く見ていましたが、今となっては恐怖しか感じられません。学校が休校になり、外出も禁止。感染をこれ以上広めない為だと分かっていますが、「今更そんなことしても遅い。」と思ってしまいます。このままで自分たちは卒業できるのか。ちゃんと将来の夢に向かって走り出すことはできるのか。そんな不安が頭をよぎることが多々あります。きっとそれは私だけでなく、世界中の子ども達が感じていることだと思います。ですが、最近では、そういう子どもや大人たちのためにSNS等を使って不安な日々を少しでも和らげようとしてくれる人たちがいます。家での過ごし方を共有したり、歌やダンスで沢山の人を元気づけようとしたりと、国を越え、互いに支え合っている人たちがいることを知りました。私はそのおかげで、自分のこれからについてより深く考えることができました。

「誰かが誰かのために動いている」

今の世の中、こういう事ができる人は数少ないはずですよ。誰だっで感染したくないですし、私だって絶対に感染したくありません。そう思う人が多い中、行動をとれる人たちは、人に元気を与えられて、人を幸せにすることができると私は思います。だから私は大人になったら、誰かのために動ける、そういう人間になりたいです。そして、お互い支え合っていて、そんな時でも頼れるような、そんな仲間とも出会いたいと思っています。これが今の私が思うなりたい自分です。

思うのは自由。問題は、どうやってその自分に近づこうとするかだと思います。答えは様々です。簡単に近づき方を見つけられる人もいれば、生きていく中で発見していく人もいます。捉え方なんて人によって全く違うのは当たり前のことです。逆に、全員同じ考え方だったら、人生面白くありません。考え方が違っていても、助け合おうと思えるのは人間の一つの長所だと思います。私はその長所を思う存分使って、今を乗り越えていきたいです。私がかこまでなりたいたい自分について語った理由は一つです。それは、「亡くなった父からの言葉です。私は父に、「幸せになれる大人、目指して頑張ってください。」と言われました。そんな事を言う父は幸せだったのか。もちろんそれは、父自身にしか分かりませんが、でも、もし残りの人生を生きられなかったことを父が悔やんでいるとしたら、私は父の分まで精一杯生きます。父の分まで思いっきり幸せになります。父が言う幸せがどんなものかは分からないけど、私は普通に今まで通りの日々を大切な人と送れることが幸せだと思います。それを私は大好きな父から教わりました。何が起こってもおかしくないこんな時だからこそ、大切な人との時間を大事に過ごしてほしいです。

よりよい世界にするために

熊野川中学校 三年



新型コロナウイルスの感染者は世界中で増え続けていて、まだ終息も難しいそうです。そして、新型コロナウイルスによって病気だけでなく、新型コロナウイルスへの恐怖や不安を感じ、それが感染者

や医療従事者に多くの偏見、差別があるということをニュースでよく聞きます。

では、差別や偏見にはどのようなものがあるのでしょうか。

アメリカでは、アジア系の男性がマスクをつけず地下鉄に乗ると、近くにいた女性が口元を隠し、その男性をにらみつけ、どこかへ移動してしまった。という事例があります。でも、今、マスクを付けることが日常の一部になっている中で、付けていない人を見ると、私も「えっ」と思うこともあります。でも、それを表に出すと、傷つく人が出てきてしまいます。

次に気になったのは七十代の大学教授が新型コロナウイルスに感染したところ、大学の関係者が受けた嫌がらせは数十件、苦情の電話は百件以上となった。という事例です。それを聞いて私は、感染症対策を多くの人たちが行っている中で、感染するのは仕方がないと考えます。それについての苦情の電話や嫌がらせがあることから、なぜそういうことをする人々がいるのか分かりません。私だったら感染した人に対して大丈夫なのかと労い、励ましの言葉をかけてあげるのが普通なのではないかと思えます。

又、保育園に通っている医療従事者の子供が保育園への通園を断られたり、心ない言葉をかけられた。という事例もあります。

確かに保育園側からしたら、他の園児に対して感染のリスクが高くなる可能性があるかもしれません。でも、今、新型コロナウイルスと闘っているのは、感染者だけでなく、感染者を治療している医療従事者であると私は思います。その中で、医療従事者の子供の通園を拒否することは、最善策ではないと考えます。医療従事者が身の危険を冒してまで、感染者に治療を行ってくれているから、感染者の回復が望めるのに、ただ、医療従事者の子供というだけで通園を拒否されてしまったら、その医療従事者はその子供を見ないといけなくなります。すると、感染者の治療ができなくなる

という悪循環に陥ってしまいます。保育園側は、その医療従事者とその家族に対して、PCR検査を受ける処置を行うことで、最低限のリスク回避となり、その結果に対して判断を行うことで、他の園児の親御さんに説明ができ、その家族への心ない言葉をかけることを防ぐことができたのではないかと思います。

知人から聞いた話によると、ある夫婦と子供三人で暮らしていた家族で、夫婦共にコロナウイルスに。感染し治療の末、結局両親共に亡くなってしまい、その子供はたった一人で引っ越しを余儀なくされ、住んでいた所から離れたそうです。その村で生活できないことになり、このことは生死に関わる問題なのです。なぜ離れてしまったのか。私はこれまでの話から、感染者に対して心ない言葉や嫌な目で見られることによって、住み続けることができなくなってしまうのではないかと思います。昔から、日本の風潮として村八分といったものがあり、村人達は、村の中でルールや決まりを破った人に対して、仲間として認めず、厳しい対応をするというものがありません。その名残が今でも残っており、現在のコロナウイルスに対しても、同様な行いが行われているのではないかと考えます。私は、このコロナウイルスの状況下で感じたことは、こういう状況だからこそ皆で結束して、励まし合ったり、助け合ったりすることでコロナウイルスに勝てるのではないかと思います。敵は感染者ではなく、コロナウイルスであり、今必要なのは心ない言葉ではなく、人を思う気持ちだと強く思います。私はこの四つの事例から、友達や友達の家族が、コロナウイルスに感染しても、嫌な目で見るとはならず、一つでも温かい言葉をかけてあげたいと思います。偏見や差別は、一つも良いことは生み出しません。傷つくのは一人だけでなく、その周りの人も良い気分にはなりません。そういう人が少しでも、気分良く生活できるよう、一人一人が相手を思いやれる日常。そんな人間であ

りたいと感じました。

私の青は君の赤・僕の楽は君の苦

光洋中学校 三年



貴方はフランスの国旗の色を右から順に言えるか。分かる人なら皆、赤、白、青色だと答えると思う。それはどこの国の人に聞いても同じで、変わらない事実だ。なぜなら、りんごやトマトのような色は赤で、牛乳や豆腐のような色は白、海や空のような色は青だと幼い頃に教わったから。しかし、知識として知ったそれらは本当に周りの人間と全く同じ感覚なのだろうか。

タイトルは忘れてしまったが、小学生の頃読んだ本のある内容が忘れられないでいる。「自分の見ている空、それが青だとする。他人が見てもその空は青だという。しかしその人が見ている空の青はどんな色なのか、はたまた全く別の色なのかは、見ている本人にしか分からない。」確かに分からないなと思った。お菓子やおもちゃを見ては「これは茶色だけど、見る人によっては、私にとっての桃色なのかもしれない。」と考えるようになった。

中学校にあがったころ、その考えは「色」だけではないことに気づいた。目で見える形だけではなく、耳で聴く音、鼻で嗅ぐ匂い、舌や肌で感じる味や触感、それと心で感じる思い。脳から指令を出すほとんどの物事が、人によって違うのかも知れないのだ。そんな小さな違いが積み重なったからこそ、世界中を探しても全く同じ人がいないのかなと思った。ということは、多数派と基準、「普通」としてしまった今の社会に生きづらさを感じてしまう人

は少数派といえどもたくさん出てきてしまうのではないか。そんな人たちに対して、多数派の人達はどう行動すべきだろう。私は少数派の人の意見を聞いてあげる事が必要だと思った。かといって、自ら聞きに行く訳ではない。それはおせっかいというものだ。少数派の人達が言い出しやすい環境をつくり、自ら話しに来てくれるのを待つと良いのではないかと思う。それにはもちろん少数派の協力も必要だ。自らすすんで要望を伝える勇気が必要である。それは逆もまた然りで、少数派にも多数派の感じ方を理解することができないのだから、お互いに理解し合えるよう言葉にして伝える必要があると思う。それには受け入れる心がなくてはいけないし、何でもかんでも自分を基準にしてしまう心を少しリセットして、自分はこうでも相手はこうかもしれないという「可能性」を考慮して慎重に行動しなければならぬ。間違えてしまう時もあるだろう。そんなときは、相手にきちんと謝って、次がないよう十分に気をつけることが必要だと思う。

最近、とあるテレビ番組で「学校に行けない子に親がかけるべき言葉」という紹介で気になったフレーズがあった。それは「○ちゃん、××君も頑張っているのだから、あなたも頑張りなさい。」という言葉。これを見て私は、とても恐ろしくなった。どんな理由でどれほど苦しんでいるのかなんて分からないのに、そんな言葉をかけてしまったら更に傷を負いかねない。他にも、子育てをしている家庭で奥さんの仕事を軽く見たものや旦那さんの疲れを馬鹿にしたものなど、多くの「○○はこうなのに貴方は」のような発言を見たことがある。それらの考え方は人を極限まで追いつめる危険な発言だと思う。

平和と戦争

城南中学校 三年



今、自分達が当り前に暮らしている平和な社会。けれど、いつ戦争が始まってその暮らしが壊れるかは分からない。だから今、平和に暮らせていることに感謝しなければならぬ。

私は、社会で戦争のことを習うまで、今の社会がどれほどありがたく、どれほど便利か考えたことがなかった。そして、昔の人がどれだけ苦しい生活を乗り越え、どれほどの人が亡くなったのかも考えたことがなかった。

社会の授業や平和についての授業、身近な人から戦争について聞いたとき、私は初めて今の社会と昔の社会について考えた。現代の日本は、食べる物もたくさんあり、戦争もないから毎日おびえながら暮らすこともない。私は産まれたときから、その生活をしているから、その生活が当たり前だと思っていた。だけど、習字の先生に、戦争のことを聞いたとき、自分たちは今、どれだけ便利な生活をしているのだろうかと思った。戦時中は、食べる物もごくわずかしかなく、着る服も一着ぐらいしかなかったという。そして、毎日毎日、空襲などにおびえ、防空壕の中で生活していたらしい。私はその様子を想像しただけで、胸が痛く、自分は絶対生きていけないと思った。そう思うと、戦争を乗り越えた人々はすごく強いなと思う。

私たちは、当り前に食事をし、当り前に服を着替え、当り前に寝ている。食事をするときも、好きじゃないから残したりするけれど、昔の人は、食べるものがなくて食べられなかったり、食べられても少なかったりしていたことを考えると、私たちは、とて

ももつたいないことをしているなと思うし、ぜい沢だと思った。また、ごく当たり前に服などを買っているが、戦争中は、服が一着しかなかったり、その一着も、すぐぼろぼろだったりしていたらしい。今の私たちは、たくさんの服をきれいな状態のまま着ているので、すぐありがたいなと思った。

この戦争のない、今のような世の中は、当り前ではなく、きちんと感じながら一日一日を大切に過ごさなければならぬ。また、いつ戦争が始まるかも分らないし、平和な時というのは、戦争の準備をしているかもしれないと、誰からか聞いた事があるから、毎日気を引きしめて過ごそうと思った。

この考えは、この平和な時代を過ごしている自分たちが思い、考えることであり、この考えをほったらかしにして過ごしてはいけないと思う。一日一日に感謝し、友達や家族といられることをありがたく思うようにするべきだと思う。また、昔の戦争のあった時のことを知って、その時の状況を考え、今、平和な世の中に生きていられることを、ありがたいと思うことが大事だと思う。これから戦争のない平和な世界に生きていられることをありがたいと思う気持ち、平和に対する感謝の気持ちを持つ人が増えていけばいいなと思う。

手話を通じて考えたこと

熊野川中学校 三年



皆さんは障害と聞いてどう思いますか。

「目の見えない視覚障害」「耳の聞こえない聴覚障害」「身体に

不自由がある身体障害」など、他にもいろいろな障害があります。障害のある方に対して、ほとんどの人は「かわいそう」などの感情を抱くのではないのでしょうか。私も障害者の方に対し「かわいそう」と思ったことはありませんが、でも見方や考え方を変えることが大切ではないのでしょうか。耳が聞こえなかったら、「かわいそう」なのでしょうか、足や腕がなく不自由だと、「かわいそう」なのでしょうか、障害のある方はいくつもの壁を乗り越え、自分と向き合い、より努力し、精一杯生きてられるのではないのでしょうか。今の私は、障害のある方の気持ちはわかりません。しかし理解しようと努力することはできるのでないのでしょうか。

私は将来、看護師になることを希望しているので、看護師になった時には手話の必要な患者さんがいると思うのです。患者さんの気持ちや状態が分かるためには手話を学んでいます。一年生の冬、学校で手話の授業がありました。聴覚障害のある方と手話通訳の方が授業をしてくださいました。その時、お話しを聞いて、手話の大切さ・重要さを感じ、手話を覚えようと思い、毎日三十分ずつ練習をしました。今年、三年生になってから手話の授業がありました。日々の練習もあって、授業が終わった後、視覚障害のある方に「普段、耳の不自由な方と手話を使って話す機会がないので、今日、手話で話せてとても嬉しいです。」と自分の思いを伝えることができました。その方は、喜んでくれました。私も、本当に嬉しくて、この時のことは大人になっても忘れないと思います。

私は、みなさんに知ってほしいマークとカードがあります。みなさんはヘルプマークとヘルプカードを知っていますか。ヘルプマークとは、援助や配慮が必要な方のためのマークです。ヘルプカードとは、ヘルプマークの書かれたカードです。このカードには「私がこうなった時は、こうしてください。」や「救急時の連

絡先」などを書いておけます。このカードを持つことで、外部からは分らない障害のある方でも、自分は障害があると周りに知ってもらえることができます。でも、このカードは、あまり知られていません。私は、障害があり、ヘルプカードを持っている2人の知り合いに話しを聞きました。一人はヘルプマークをつけていることで、体調が悪かった時、優先席を替わってもらえて本当に助かったと言っていました。もう一人の方は、ヘルプカードを持っているけど、付けることに抵抗があって付けていないそうです。みなさん、矛盾していると思いませんか。私はなぜ付けるのに抵抗があるのか考えました。周りに自分は障害があると知られたくないという思いもあるかもしれませんが、一番大きな理由は、私たちの方ではないでしょうか。なかには声をかけたり、援助や配慮をしたりなどしている人もいます。でも、知らず知らずのうちに避けてしまっていますか。冷たい表情で接していませんか。そうではなく「何か伝えることはないか」「何か困っていることはないか」と考えられる人が増えるといいなと思います。まず、考えるだけではなく、行動に移すことが大切だと思います。声をかけることは、難しいことではありません。少しの勇気で「大丈夫ですか?」「席をゆずりますか」「何か手伝えることはありませんか」などの一言でいいのです。まずはより多くの人がヘルプマーク・カードのことを知り、理解することが大切だと思います。

私たちは、何時、病気や事故で障害を負うかわかりません。「私は絶対に大丈夫」ではなく、「私も障害を負う可能性がある。」という気持ちを持ち、健常者と障害者の立場を対等に考えることが大切だと思います。